

流離譚 (新潮連載 昭和五十五年二月号)

三月号休み

第四十四回〜第五十回

昭和五十五年十月号)

新潮昭和五十五年二月号は流離譚を休み 「脱走者の兄」を書いている。その出だしは

かねてから私は、那須慎吾、大石団蔵などと一緒に、吉田東洋を殺害したあと、土佐藩を脱走した安岡嘉助が、大坂住吉藩陣屋に勤務してゐた兄の覚之助や道之助と出会つた様子を知りたいもの

だと思つてゐた。．．

とあります。最後に

覚之助は、同志でがほとんど帰国したあとも、しばらく残務整理のため京都に居残り、翌九月に土佐にかへると同時に、「類族預」といふことになつて、獄卒の監視つきで家内蟄居を命ぜられ、やがて永牢入りになる。一方嘉助は吉野の山中で幕軍に包囲され、手甲に貫通銃創をうけて逮捕されたあと、翌年二月に六角の獄舎で処刑された。

何となくこれまでをまとめていますようです。何

故流離譚はこのように書いているのか、思ったことを再掲もありますが記載します。

・山北村の安岡の家に藩の佐幕派が襲撃してくることも想像して・とありますが、恒之進は勤王攘夷の考えはありましたが、武市の勤皇組織に血盟していません。藩の中から改革を考えていたと思います。

嘉助の脱藩に関連して

・父文助から嘉助が脱藩し行方不明になったことを知らせた手紙を受け取つてをり、・《四月

廿三日の御状、この間相達し、拝読仕り嘉助候。
嘉助儀行方相分ならず候趣、さぞさぞ御心配なさ
るべく、御悲歎のほど察し奉り候。・・》と書かれ
ています。文助日記に脱藩＝亡命について次の記
載があります。

文久二壬戌年

四月八日嘉助大石團蔵那須新吾坂本龍馬亡命

暗殺は四月八日で、坂本龍馬の脱藩は三月二十四
日ですので日記の四月八日は記載した日付ではな
く、暗殺事件が起きた日付でしょう。日記に記載

された日も近いでしょう。この知らせは文助の従兄弟（本家平四郎正利の息子）滝助正定《用人久万へ養子》から得たのでしょう。これ以後も日記に久万から得た情報が記載されています。この情報を持って来た時、次の嘉助の歌も渡されたのでしょう。

二た、悲盤るくへ起世奈らぬ我身をも

春川留八君乃御為奈り■里

文助は嘉助の自筆の歌を、四坊山の墓に彫り残したのです。その拓本を次に提示します。



亡命の記録に続いて

五月廿日覚之助道之助大坂より帰ル

とあります、これについて

・住吉陣屋詰め勤務を下番して、五月下旬

には土佐へ帰るのであるが、そこで前にのべたや

う（*嘉助と堀越に嘉助に会ったこと） 謹慎を申しつけられてゐる。・・

とあるが、会ったことが謹慎の理由でしょうか。

山内家史料公記 「幕末維新第三編上安政六年（文久二年）」に住吉陣家に動員された郷士の中に安岡覚之助の名があり脇に「追下シ被仰付」とあります。もう一人清岡道之進も追下シを受けています。

清岡は嘉助と会っていないでしょう。清岡道之進は元治元年二十三士（野根山二十三士）のリーダーです。覚之助は京都で武市の檄に感動し嘉助に

手紙を出しています。尊王攘夷の活動への勧誘です。これが住吉陣屋で広がるのを藩の役人が恐れ二人が追い出したのではないか。

この罪は軽いのか半年後、覺之助は藩の指示で京都へ御臨事御用で行きます。京都在住時に覺之助は島村寿之助、土方楠座衛門とともに薩摩藩邸へ那須信吾、安岡嘉助の処遇についてお願い行っています。受けた願いについて、京都留守居から六月廿五日付で薩摩藩の上司へ処置の伺いの手紙が出されています。

この手紙は流離譚が書かれた後に、龍馬記念館で展示され公になっていきます。

流離譚ではこの事実に基づくのではなく、覺之助と嘉助が会ったとし、次のように書かれています。

・・嘉助のことを「兄に因循論を笑ひ候やう大活気もの」などといひながら、かへつて弟に対する愛情はよく出てゐる。

覺之助は、同志がほとんど帰国したあとも、しばらく残務整理のために京都に居残り、翌九月に

土佐かへると同時に、「類族預」といふことになつて、・・・

那須信吾、安岡嘉助は八月十三日 天誅組 大和行幸に参加し、この薩摩藩への相談が咎められてか覺之助、島村寿之助は高知に戻され親類預になつたのです。

嘉助の天誅組への参戦は、覺之助から嘉助に送られた手紙が契機です。この手紙は嘉助が出て行った後、家に置いていき、この手紙（次頁参考）を文助は読んだでしょう。

流離譚ではこの点について書いて書いていないが、こんな想像をしました。文助は手紙を久万に見せて、暗殺実行迄の間に嘉助と久万は会ったのでしよう。嘉助は、前述の歌を久万に渡しのでしよう。

嘉助の葬儀が覚馬の呼び掛けで行われました。

そこに久万は参列しています。文助は参列していません。覚之助は本家に蟄居状態だったためか参列していません。

他見無用
前文乃常此間武市半
平太閑東より帰り当方全
寄り弥太郎の囑言以
我等を尋呉れ咄承
候處仲々東武之形勢急
に色濃く矢張幕府
昇平を粉飾して一時
を糊塗する口姦謀の様存し
奉候苟も 神州ニ
生まれ稍心性智識を
存し候もの扼腕切齒
聲ヲ吞んで竊か耳
此を歎せさらんや實ニ
一刻も安楽尔とい能られ
ぬ時節諸努力せよ
半平太之爲人兼て承
知候ハ能得共此程之好男
子とハ存しもよらず此度之
義憤古之文山先生
ニも恥ぢざるのいき込をミぞ
此上ハ務メて士心を鼓舞
致し吾人ニテも同志之
勢古しらえ候様實ニ
躬命を抛て處々奔
走致し 神州を補
繕する丹心可感し、必
、出府致し御訪時勢御
聴下さるべき候若し参
り候時ハ此方懇ろ耳
尋ねて呉候一禮御述て
下さるべく候此先生乃腸ハ
仲々大ききたの毛しく、
先づハ右ばかり匆、あ
奈かしこ

覺之助

九月廿六 夜
嘉助殿

他見無用
前文乃常此間武市半
平太閑東より帰り当方全
寄り弥太郎の囑言以
我等を尋呉れ咄承
候處仲々東武之形勢急
に色濃く矢張幕府
昇平を粉飾して一時
を糊塗する口姦謀の様存し
奉候苟も 神州ニ
生まれ稍心性智識を
存し候もの扼腕切齒
聲ヲ吞んで竊か耳
此を歎せさらんや實ニ
一刻も安楽尔とい能られ
ぬ時節諸努力せよ
半平太之爲人兼て承
知候ハ能得共此程之好男
子とハ存しもよらず此度之
義憤古之文山先生
ニも恥ぢざるのいき込をミぞ
此上ハ務メて士心を鼓舞
致し吾人ニテも同志之
勢古しらえ候様實ニ
躬命を抛て處々奔
走致し 神州を補
繕する丹心可感し、必
、出府致し御訪時勢御
聴下さるべき候若し参
り候時ハ此方懇ろ耳
尋ねて呉候一禮御述て
下さるべく候此先生乃腸ハ
仲々大ききたの毛しく、
先づハ右ばかり匆、あ
奈かしこ

嘉助殿
九月廿六夜

新潮流離譚第四十四回の書出しは、

大石円、通称弥太郎は、・・

彌太郎は通称ではなく旧名、明治の改名で圓に改名した。権馬が諱である正徳を名としたので同じ時期であろう。大石の諱は元敬ですので新たな名にしています。

その大石について

・・・いまは大石について記憶を持つてゐるのは年長従兄が一人しかゐなくなつた。しかし、その従兄に大石のことを訊ねると、従兄は意外なこと

をこたへた。

「それは、．．わしは、ほんの子供だったから、一人で西座敷へ行つてお爺さんが刀手入れをするのを見よつたても、．．．」と書かれています。年長従兄（父は思われるが）は明治四十五年誕生で、大石は大正には現在の高知市内に移っていますので、従兄がそのような記憶があるのは疑わしい。

私の祖父が大石の訪問のことを記録した日記を紹介します。

明治四十五年九月十日 火曜 曇 豫定 済し

中食後前乃池で鰻をつりよつたら大石圓老人が
来られ刀劍ヲ手入をしてやろうとの事であつた
お頼み申す御話しが長がいたので遂ニ二刀しか手
入が出来上らず本夜をも安らる。

九月十一日 水曜 晴 豫定 済し

大石老人本日も朝から刀劍乃手入をするく毎し
少し昔乃面白き話をして聞かして下ださる。

午後四時頃谷迄帰らると乃事ニて見送られたり

・・章明日岡山へ立つとの事で藤之進を呼び本
夜一寸飲む。刀劍乃事は大分手ニ奈し智識を得た。

刀剣を二■三よき切れあぢのも乃を求めよと乃
事を□□ふ進められ遂ニ終みたり。

これを読む限り、安岡が大石を嫌っていたとは思えない。

大石が吉川を離れ現在の高知市内に移る頃、お上に来て次の書を残しています。歌から推測すると三月のようです。「西宮」とはお西と呼ぶ文助の家で、廃墟となった家の庭を見て昔を思い出して歌ったのしょうか。年齢の八十二歳を満とすると明治四十四年です。

八十二 叟圓

西宮之

ふ里多累（ふりたる）

庭の

木傳似（に）

あ王（あわ）ゆ起（き）ちらし

鶯のな九（く）

汗二
園

母之

心

庭

本

書

卷

大正二年十月五日 日曜 晴

・・・二時頃大石圓御老人ガ来ラレタ今日ハ例
ニ依ツテ刀劍ノ手入ヲシテヤロトノコト余リ沢山
御依頼スルノモト思ツテ二本丈ケ御頼ミヲシタお
上カラモ持ツテ来タ四時過ぎ帰ヘラレタxモハ安
岡権馬サンノ墓へお拝テ来タモノダ

大石は現在の高知市内に住んでいたのか

十月十二日 日曜 晴

今日ハ大堀輝招魂社ニテ元治甲子(*元治元年
野根山二十三土の事件)年代ニ殉シタル志士五十年

祭施行ニ付キ安岡嘉助遺族代理トシテ行キタリ大
石老人モ来られて居つテ中々面白カツタ主ナル知
名ノ外下ノ士ハ皆参列セリ

生活は苦しかったのか、

大正五年三月十八日 土曜日 天氣 晴 寒暖

・・香宗野村某、野市近森雅義兩名来ル要事ハ大
石圓ギノ窮状ヲ救ハル為メ義金募集中ナルヲ以テ
応分乃寄附ナリタシトノ事デアツタ金五円ヲ依テ
寄附ス

大正五年十月三十日 没

第四十五回の書出しは、

ところで、大石弥太郎がチヨン髻を切る機会を逸した最大の理由には、富永有隣との邂逅は、・・

大石は写真が残っているので丁髻有無が話題になるが、正徳（権馬）はどのようなだろうか。正徳が明治七年甲戌九月書いた「趣意書細註」に次の記載がある。

己レヲ正シ以テ人ヲ正ス

一衣服居処常用一園ニ洋俗ニ似タル禁ス是国ノ大害ハ全ク此ニ在ヲ以テニ氏洋制洋俗ヲ主張スル

者ハ皆天位ヲ廢シ共和政治トナサントスルノ賊ノ
姦謀ヨリ出ルコトナレハ其深意ヲ解セスシテ妾ニ
唱フルト雖トモ賊ノ黨類ヲ免レハ且今日誅スル所
ハ国賊ノミ己国賊ニ似タル所ア（注 横に書き直
し）リテ彼ヲ誅ハ是權ヲ妬ミ官ノ奪ハント欲スルニ
出ル所なるか如シ故ニ先之ヲ已に禁シテ而メ後ニ
人ノ之ヲ行コトヲ禁遏ス是ヲ義ト言フ也

・・・

これを書いた前に散髪脱刀令（明治四年八月九
日に太政官第三百九十九号）が出されていますの

で、正徳は鬚を結い続けたと思います。

この頃、富永有隣がお上に居て書いた『酔霞観
記』があります。

酔霞観ノ記

酔霞観ハ安岡氏ノ居也

眺望佳絶ノ地

清切ニシテ

最モ暑ク避クルニ宜シ

恨ムラクハ宮構未ダ善ヲ尽クサズ

坐ニ風景ノ半ヲ観ルニ劣ルモ亦

足ルヲ知ルノ意カ

東西ノ峰密皆竜虎猊狗ノ形ヲ□(な)ス

郊勢ハ西ニ奔リ

海勢ハ南ニ濶ク奔ルガ如ク

海郊ニ及ビ秧翠ニ面ス

茫々タル洪濤

山林 人屋浮動スルガ如シ

竹ハ黄 松ハ翠

風過グレバ即チ琴韻ヲ為ス

洋潮豪斯多刺里ニ撰リ

松魚絶味

復珊瑚殊ヲ出ス白帆黒煙清浜ノ樹間ニ見ユルハ

是船ノ相往来スル也

余□然トシテ来リ宿レハ佳景ニ驚キテ曰ク

是応ニ志士仁人ノ氣ヲ養フベシ

若シ此ノ觀無クンバ

豈出州ノ真ト蚊トニ堪ヘンヤ

況ンヤ安家醞頗ル美隣家時々琴声

甚ダ南薰ノ愠ヲ解クヲ覺ユ

凡ソ人ノ世ニ在ルヤ

平素宜シク其ノ氣ヲ養フベシ
所謂養コトハ何ゾヤ

この書のなかで琴の音が聞え、そのことを

お上で「眇眼痘面 状貌魁梧」の客が聴いて

みるとも知らず、広い家の中で一人、無心にぴん
しやんと琴をさらつてゐる少女の姿が眼に浮かぶ。

三歳で父恒之進を喪ひ、間もなく母とも別れた祖
母フサは、この頃すでに本家から覚之助の次男席
次郎（正風）を養子に迎へてゐたはずである
が……。

フサは幼児の時に漢字を習うこともなかったの
で琴は習うことはなかっただろう。房は明治にな
って箏曲の免状を受けている。

箏曲表組傳授証 授業師坂部城芳

明治三十九年六月一日安岡房 生田流

この琴・三味線を昭和三十二年古物屋きんこ番と称する
人に房の琴及び三味線の古るを賣る琴は虫食ひ三味線も皮
も引け消して居る直ぐに使用出来ぬとの故賣つた。

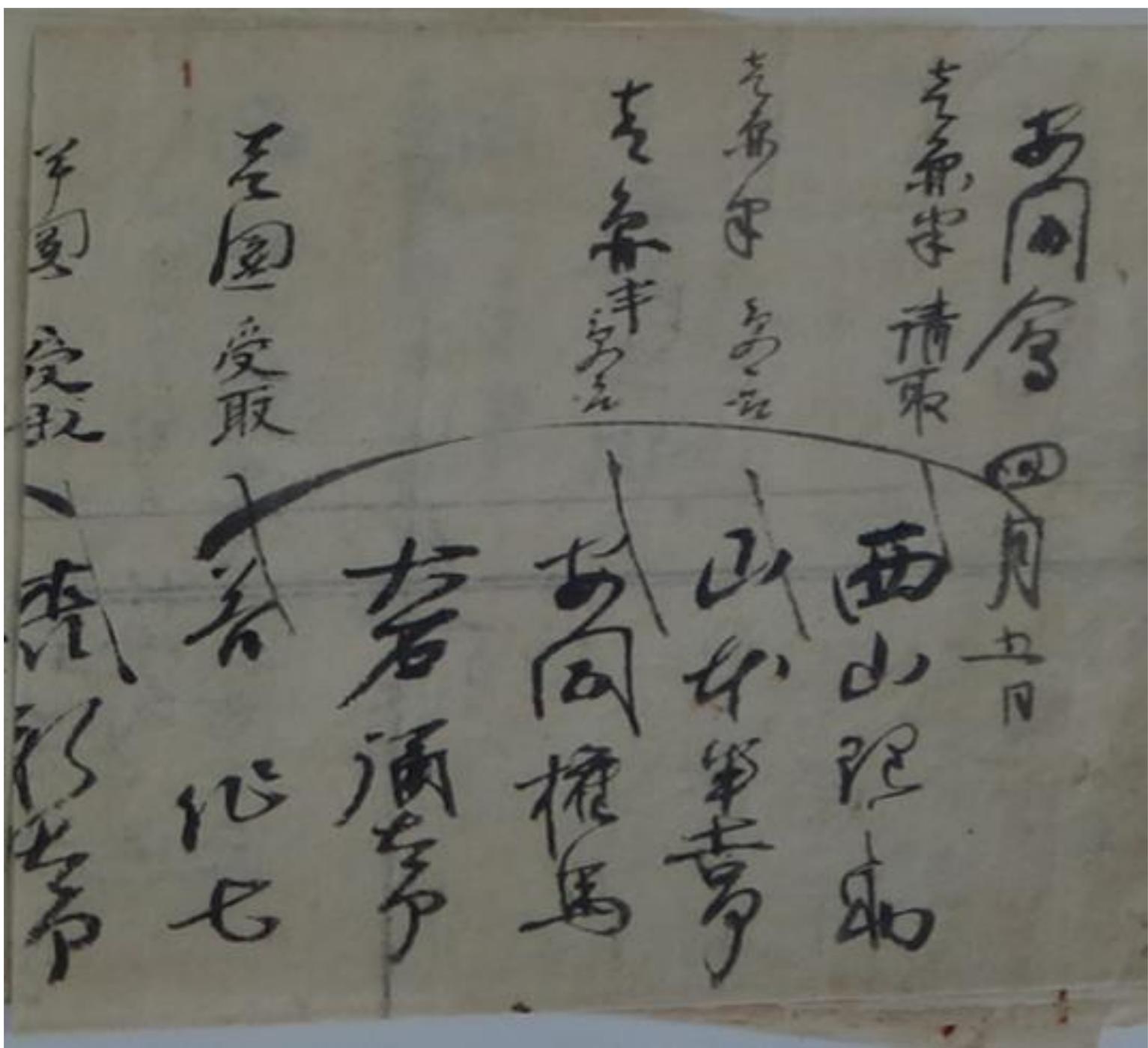
と秀彦の記録にありますので、琴をさらつてゐ
たのは、少女でなく源右衛門または、覚馬の寡婦
だったのだろうか。

この項最後に

・・・実兄恒之進が文久二年・・・死んだのを皮切りに、実弟の覚馬、従兄の嘉助、覚之助と次ぎに死んで行つた有隣を助けるといふよりも、目的はもつと他にあつたらう。権馬は池知退蔵と二人で、長州の前原一誠のところへ大石から何か重要な手紙をことづかつて出向いたこともあるらしく、・・・と書いています。何を目指していたのでしょうか。

私は明治政府が実現した社会でなく「本当の尊王攘夷」の実現を目指していたと思います。その活

動の記録と
 思われるの
 がある。「安
 岡會」の表
 題がある紙
 の切れ端が
 あります。
 これは章
 太郎が襖を
 剥がして取



り出した資

料の一つで、

資料に大石

彌太郎、谷

作七などの

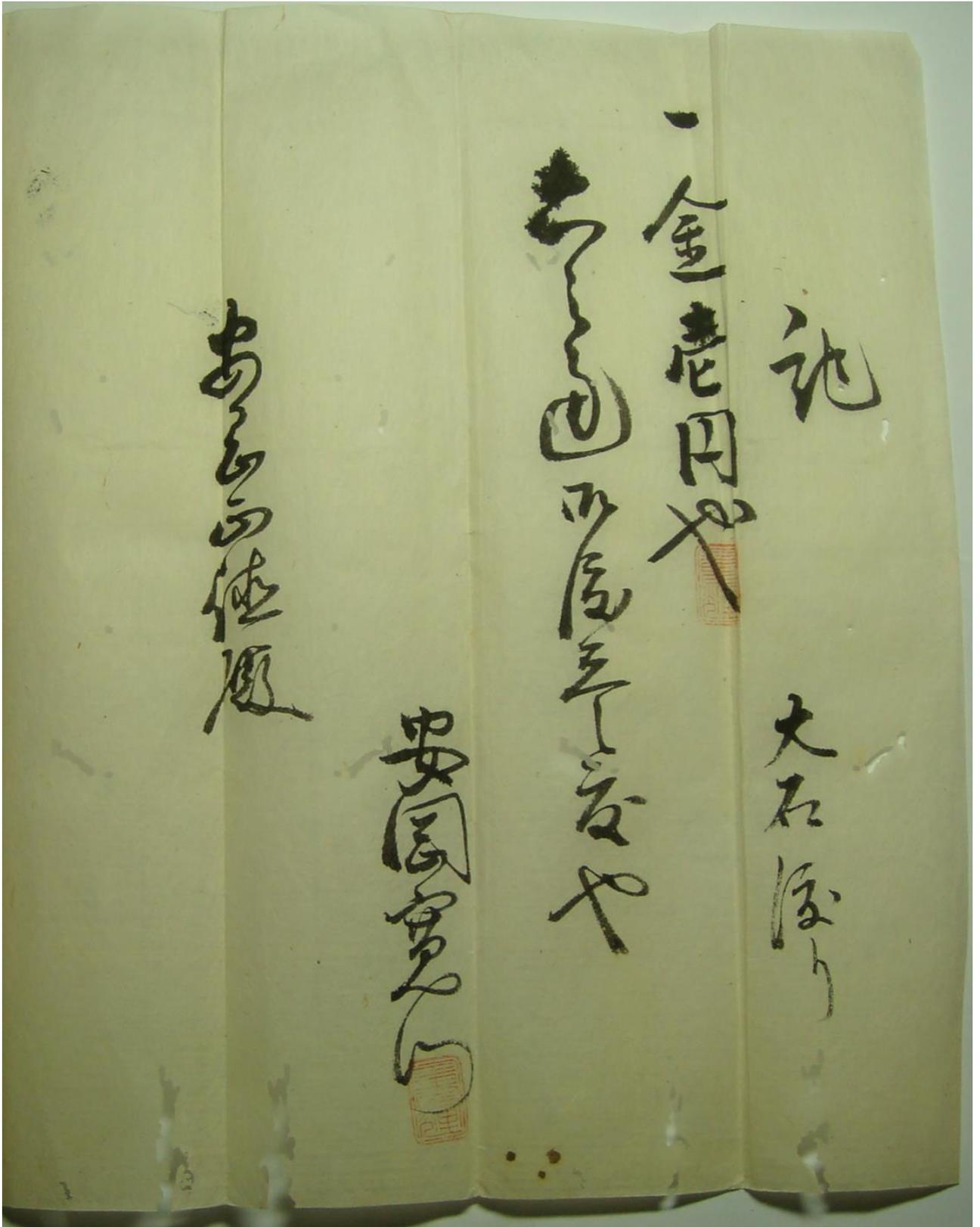
名あり、会

費の取りま

とめが記載

されていま

す。この會



記

大石

金田

田尾

安國

徳

に大石彌太郎は欠席で、大石は反明治政府運動を東京で展開中、そこに金を送る基金のようです。これとは別に送金した資料が残っています。

正徳は、尊皇攘夷から尊皇倒幕に変化して出来た明治政府に反対していた。それを見越して戊辰戦争に参加しなかったのだらう。大石も戊辰戦争後、本来の尊皇攘夷運動を始めのだらう。表題「庭雀戯語」に権馬が書いたと思われるのがある。

封建の治体了復して土崩の患害乎救ふへき事
凡数百年の間諸侯其封域を守り其士子教へ其

民を救ひし此上大的政令も行届き風修質直
なをし・・・

その中に次の一文がある。

土佐の國大石圓 誓願再月日

前後を読み正しく解読が必要ですが、大石力神
主の職で土佐を離れていた頃、大石の復帰を願つ
た文ではないか。

第四十六回の書出しは、

大石田の家は、ノイチの海岸よりの横井といふところにある。地図で見ると、山北村からはほぼ四キロ、しかし山裾にそった道を歩けば実距離はその倍ぐらゐであらうか。

・・・大石田の家の直ぐうしろに大石團蔵の家があつたことだ。

と大石の家と安岡の家と四キロ離れているとあります。

明治二年の山北村本田新田領知根居帖

権助 明治二年巳八月

に次の記載がある。

「大石弾蔵上り知安岡覺馬作式買」

大石團蔵の土地からの収穫を購入したとのこと
だろうか。それとも、耕作権を買い取ったのであ
ろうか。覺馬は明治二年には亡くなっていたので、
解読できないが、大石弾（団）蔵の家と何らかの
繋がりがあったのだらう。そして次の文章がある。

・・團蔵は明治三年ではなく、慶応元年に薩
摩藩の留学生十五人のなかにまぎれこんで英国に

渡つてゐたわけだ。

この留学した学生の群像が鹿児島にあるが、当初は高見など他藩の二人は群像の中に入っていないが、追加されたようである。

第四十七回の書出しは、

大石円は、明治十一年九月十五日の朝、裁判所から突然呼び出されて、釈放される。大石より先に久万真澄が釈放されたとある。この久万と文助と話していた久万との関係があるのだろうか。そ

れに続いて

権馬は・・九月十九日に牢獄のすぐ近くにある木賃宿のような旅籠屋で息を引きとる

とあります。一月から九月九ヶ月の牢獄です。「余獄中九箇月」で始まる。署名、日付がない漢文の史料があります。

正徳の考えを書いたと思われませんが、字が整い、衰弱した正徳の字に見えませぬ。誰が書いたのでしょうか。私は正風と思います。思想的に正風は正徳の思想を理解していたのでしよう。

自思悲壯

余下獄九閱月憤懣與慷慨相雜不覺數
 癡狂或中霄推枕狂起高吟或白晝低頭
 默坐而每慨衝吻得蓋詩頗多無所管得
 昏從得而從失今託其十一作他日笑咳
 云然余獻中壯強可見矣
 決飲務曾拂醉顏放鎗荷鎧出邊關扁舟汎
 雨長隨海孤馬暗崑豐筑山報國心肝窮倍
 切懷家涕淚遠忬間苦辛伏水西流去空就
 囚人故園還

山北の家に明治十四年発行された「攘夷事情」と維新直前の歴史をまとめた本が残っています。

正風が購入したと考えます。新尊王御攘夷運動を展開していた明治八年に正徳から正風へ土地売渡した次の記録があります。大石、正徳の運動を支援するための基金にしたのではないか。

地所永代賣渡證書

安岡正徳 明治八年安岡正風、

明治八年乙亥八月十九日改村用係

隣に住んでいた同志、遠い叔父、甥の関係でな

いように思います。正徳の死後家督を息子虎一郎に移譲する願いの文書を役所宛てに出し、後見人となります。松山の牢にいた時、何回か訪問し正徳から手紙を貰っています。

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, written on aged, yellowed paper. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines, flowing from right to left. The characters are highly stylized and interconnected, characteristic of traditional Chinese calligraphy.

Handwritten text in cursive script, likely a signature or a specific section of the document, located at the bottom of the page. It consists of several large, bold characters, possibly including the name of the author or a specific title.

流離譚は「道太郎が松山の牢獄まで面会にやつて・・・それはわからない」と書いています。こんな想像をしました。この頃道太郎は土陽新聞で坂崎紫蘭の下で働いていました。紫蘭は小笠原唯八の傳記を書く積りで、ネタ探しで小笠原と京都で一緒に行動していた権馬（正徳）の記録がないか道太郎に相談し、道太郎は正徳の日記存在を知り、参照の許諾を得るために行ったのではないか。これらの資料は米蔵の奥に隠すように仕舞われていました。